

『古事記』の「於是」の後件について

— 「出来事」類と「紹介・登場」類 —

伊 土 耕 平*

The Conjunction "KOKONI" and its Following Sentences in KOJIKI

Kohei Ibo

要 旨

『古事記』の接続詞について、後件を分類し、分類ごとにどの接続詞が多く使われるかを調べると、特定の後件に特定の接続詞が使われる傾向のあることがわかる。本稿では、「於是」が多く使われる後件、すなわち「i類 出来事に類するもの」と「j類 紹介・登場」について、全用例を掲げて、コメントを加え、「於是」の使用率などのデータを示す。

I はじめに

周知のように、『古事記』には「故」「尔」「於是」など、多くの接続詞が使われている。そして、後件（＝接続詞に後続する事柄）を分類し、各分類ごとに「故」などの使用率を出すと、偏りがあることがわかる。すなわち、甲という後件の場合は「故」の使用率が高く、乙という後件の場合は「於是」の使用率が高い、などの事実である。とくに偏りのないものもある（以上、前稿A。拙稿の略号については末尾の引用文献一覧を参照されたい）。

私はこれまで、「故」の使用率の高いものに関しては、多くの用例を掲げて、具体的に説明してきた（前稿C・D・Fなど）。しかし「於是」や「尔」の使用率の高いものに関しては、まとまった形では何も説明していない。

そこで本稿において、「於是」の方について、その使用率の高い後件二類を取り上げることにした。すなわち、前稿Aに言う「i類 出来事に類するもの」（以下「出来事」と略す）と、「j類 紹介・登場」とである。これらについて、全用例を掲げて、説明を加えることにする。

もっとも、「於是」の使用率が高いとは言っても、それはあくまで統計学的に見れば「於是」の方に偏っているということであって、感覚的には、それほど高いとは思えないかもしれない。ともかく、『古事記』において、ある特定の後件が「於是」の使用率が高いというのは、興味

深いことである。この事実を具体的に提示するのが、本稿の第一の目的である。

本稿の第二の目的は、私の分類のしかたの妥当性、ひいては分析そのものの妥当性について、読者諸賢の判断を仰ぐことである。つまり、これまでの稿では、紙幅の制約のために、例えば、「出来事」類というグループがある。例文はこれこれである、という程度のことしか述べられなかった。これだけでは、その分類が妥当なものであるか、判断するには材料不足である。そこで本稿において、二つの類についてだけではあるが、全用例を掲げ、妥当性の判断の材料に供したいと思うのである。

以下、テキストには西宮一民編『古事記 新訂版(六刷)』(桜楓社1992年)を使用し、引用は読み下し文の形で行う。ただし、句読点や送り仮名は適宜加減した。漢字の字体については、JISコード表にある字は、なるべくそれを使うことにした。訓注などは省略した。仮名書きの部分はカタカナにした(固有名詞の場合はそのまま)。また、引用文中の「……」は省略を、「/」はテキストの改行を、[]は割注の部分を表す。

II 「出来事」類

『古事記』の接続詞全般のことについては、前稿Fで述べたので、ここでは省略し、すぐに本論に入る。

まずはi類の「出来事」類である。この類は、“予測不可能”という特徴があった。例えば「いきなり猪が出てきた」などという事柄がこの類に属するが、このようなことは予測不可能である。そして、このような事柄が後件になった場合「故」は使いにくいはずである。「故」は“確かな気持ち”を表すと考えられるからである。具体的には、例えば、「確かにいきなり猪が出てきた」とは通常言いにくい(以上、前稿A)。

i類はi1~i3の3種に細分されるので、以下、その細分類ごとに用例とデータを掲げ、具体的に記述しよう。用例を掲げる順は、接続詞別、出現順である。

なお、用例は、当該接続詞を太字にし、後件(と私が判断した)部分に下線を引く。i1などの分類記号につづくカッコの中は、その類の略称である(前稿Aを参照のこと)。用例の文末の数字は、最初の3桁がテキストの頁で、後の2桁が行を示す。その後「=F24」などある場合があるが、これは前稿ですでに使用した用例であることを示す(この場合は前稿Fの例文24の意)。

ii「出現・発見」○○が現れる。○○と出会う。見ると○○があった/いた。

①「故」の例

(1) /尔、其御子一宿肥長比賣と婚ひしたまひき。故、其美人を竊に伺ひたまへば蛇ぞ。 12306=F24 [出]

(2) 市邊王の王子等、意祁王・袁祁王、此乱を聞きて逃去りましき。……針間國に至りまし、其國人名は志自牟が家に入りまして、身を隠したまひて、馬甘牛甘に役はえましき。/ ……。……。/ ……。於是、盛りに樂げして、酒酣にして、次第を以て皆舞ひき。故、火を焼く少子二口、竈の傍に居てある、其少子等に舞はしめき。 20407=B92 [発]

②「尔」の例

(3) (27のつづき) 其中の尾を切りたまひし時に御刀の刃毀けき。尔、恠しと思はし、御刀の前を以て刺割きて見そこなはせばツムハの大刀在り。04909=E2 [発]

(4) /尔、日子番能迹々藝命天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光

らし下は葦原中國を光らす神、於是有り。07407 [発]

- (5) (火遠理命は) 即ち其香木に登りて坐しき。尔、海神の女豊玉毘賣の従婢、玉器を持ちて水を酌まんとする時に、井に光有り。08107 [発]
- (6) 大毘古命は先の命の隨に高志國に罷行きき。尔、東方より遣はさえし建沼河別と其父大毘古命と共に、相津に往遇ひき。11409 [出]
- (7) 建内宿祢命其太子を率て……假宮を造りて坐さしめき。尔、其地に坐す伊奢沙和氣大神の命夜の夢に見えて云ししく……。14608=C16 [出]
- (8) (雄略天皇は) ……河内に幸行きき。尔、山上に登りて國內を望けたまへば、堅魚を上げて舎屋を作れる家有り。19312 [発]
- (9) /又一時に、天皇葛城の山上に登幸しき。尔、大猪出づ。19811=A43、E1 [出]
- ③「於是」の例
- (10) 此時に、箸其河より流れ下りき。於是、須佐之男命人其河上に有りけりと以為ほして、尋覓ぎ上往ししかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置いて泣けり。04713=B93 [発]
- (11) 八十神……大穴牟遲神に俗を負ほせ従者として率往きき。於是、氣多の前に到りし時に、裸の菟伏せり。05110 [発]
- (12) 其野に入ります時に即ち火を以て其野を廻焼きたまひき。於是、出でむ所を知らさぬ間に、風来て云ひしく…… 05503 [出]
- (13) /於是、天津日高日子番能逐々藝命、笠沙御前に麗しき美人に遇ひたまひき。07711 [出]
- (14) /於是、其弟泣患へて海邊に居しし時に、塩椎神来て、問ひて曰ひしく…… 08010 [出]
- (15) 諸の魚どもの白ししく「このころ赤海鯉魚、喉に鰓ありて物得食はずと愁へ言へり。故、必ず是取りつらむ」。於是、赤海鯉魚の喉を探れば鈎有り。08306=B94、C17 [発]
- (16) ……其日子に白して言ひしく「……願はくは妾をな見たまひそ」。於是、其言を奇しと思ほして、其方に産みたまふを竊に伺ひたまへば、八尋ワニに化りて匍匐委蛇ひき。08509 [発]
- (17) /於是、天皇患賜ひて御寝ませる時に、(出雲大神が)御夢に覺して曰ししく「我宮を天皇の御舎の如、修理ひたまはば……」12111 [出]
- (18) /於是、詔ししく「茲山の神は徒手に直に取りてむ」とのらして其山に騰りましし時に、白き猪山邊に逢へり。其大きき牛の如し。13506 [出]
- (19) (履中天皇は) 上幸して石上神宮に坐しき。/於是、其イロど水齒別命参赴きて、謁さしめたまひき。17910 [出]
- (20) ……猪甘老人を求めたまひき。是、求め得て、喚上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆其族の膝の筋を断ちたまひき。…… 20904=B95 [発]
- ④その他
- (21) (須佐之男命が) 其頭の虱を取らしめたまひき。故尔、其頭を見れば呉公多に在り。05510=E4 [発]
- (22) ……竺紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降りましき。故尔、天忍日命・天津久米命……御前に立ちて仕奉りき。07602=E6 [出]
- (23) /故尔、逐藝速日命参赴きて、天神の御子に白ししく…… 09613=C18、E.7 [出]

参考のため「出現」には〔出〕、「発見」には〔発〕という略号を各例文末につけた。

データを見てみよう。「故尔」「故於是」などは、前稿Eなどで述べたように「故」と「尔」が別々に働くと考えるので、「故」「尔」それぞれで一つずつ数える(以下同様)。結局「i1出現・発見」に関しては、

(24) 故=5例(19%)、尔=10例(39%)、於是=11例(42%) 計26例

ということになる。これでは「於是」の割合が特別高いとは思えないかもしれないが、前稿Aで示したように、もともとの数が異なっているのである。すなわち、『古事記』全体で、

(25) 故=396例(47.8%)、尔=288例(34.7%)、於是=145例(17.5%) 計829例

のように¹⁾、「故」が一番多く、「尔」がそれに続き、「於是」が一番少ない。このことを考慮に入れなくてはならない。

そこで、(24)のデータに偏りがあると言ってよいかどうかをカイ二乗検定してみる。(25)を参考にして理論値(期待値)を出し、カイ二乗値を計算すると、13.68となった。よって、危険率5%未満で有意である(自由度=2)。(24)には偏りがあると言ってよい。(24)と(25)の百分率を比較すれば、(24)は「故」が少なく「於是」が多いという偏りになるろう。

「出現・発見」類は、“予測不可能”ということ以外に、物語の発端・冒頭にくるという性質があるはずである。なぜなら、新しい人物なり事物なりが、冒頭で現れる(発見される)と考えられるからである。すると、「於是」が多く使用されるという予測が立つ。「於是」は切れ目を表すのが本義であって、結果的に物語の冒頭にくることが多いからである²⁾(前稿A、B)。そして上のように、データはその予想を裏づけた。

実際に用例を見てみると、例えば(10)は、二人の老人と娘という新たな登場人物が現われ、新しい物語が始まる。一言で言えば“新展開”である。これは「於是」の、物語の冒頭を示す用法である。「於是」の他の多くの例も、同様に新展開の例と考えて良いだろう。テキストが「於是」の直前で改行しているものも多い。

しかし(15)と(20)は、新展開とは言いにくい。これらは、“間”を置いて、やっと見つかった、という感じであろうか。「於是」は切れ目を表すのであるから、間を表現することもできるはずである(前稿B)。(15)が「尔」だとすると、その場に鯛がいたような印象を受けるし、(20)が「尔」だと、あまり苦勞なく、すぐに老人が見つかったような印象を受ける。

(16)も新展開とは言いにくいので、別の説明が要る。「於是」は切れ目を表すのであるから、文脈のそれまでの調子を変えることができる。調子を変えることによって、緊張感を出したり、急激な感情の変化を表現したりできると、前稿Bでは考えた。別の言い方をすれば、「於是」は、重大なこと、大げさなことを表現するのに適しているのである。(16)は、妻が「ワニ」であったという大きな驚き・恐怖の場面であるから、「於是」が使われたわけである。

「尔」は、「於是」に比して、それほど重大さはない。例えば(3)は「おや、変だな」という軽い感じで見ただけであろう。(5)(21)の「尔」も、「ひょいと見ると」という感じであろう(21はさらに「故」が付加されているが、その理由については前稿Eで説明した)。「於是」だと大げさな感じになってしまう。また(6)は、「大毘古命は高志国に行った。そして、建沼河別と大毘古命は相津で行き会った」というように、単なる継起的な表現で、(7)~(9)も単なる継起的な表現である。

「故」があまり使われない理由については、すでに述べたが、「出現・発見」というのは、未知のものがいきなり出てくるのであるから、「出来事」類の中でも“予測不可能性”がもっとも高いと言える。よって「確かな気持ち」の「故」は使えないのである。もっとも、「故尔」を含めれば5例の「故」があるが、それらには、「故」が使われるだけのまた別の理由がある

のである。それらの理由については、前稿B・E・Fで説明したので、ここでは繰り返さない。

ただ、(4)が「尔」である理由がよくわからない。もしかするとこの「尔」は、「……光らす神、於是有り」に係るのではなく、「日子番能逐々藝命天降りまさむとする」に係るのかもしれない。「天孫が地上に降る」という後件は、2例あるが(07501、07512)、いずれも「尔」である(1例は「故尔」)。よって(4)も、「尔」は逐々芸命が降るといふ部分に係っているのかもしれない。もしそうだとすると、i1類から「尔」が1例減り、「於是」の百分率が2%ほど上がることになる。これは本稿にとって好都合なことである。

ちなみに「天孫が地上に降る」という後件に「尔」が使われる理由については、前稿Eの例文(33)の解説のところで述べた。

i2「現象」自然現象・社会現象・その他の現象が起きる。

①「故」の例

- (26) 速須佐之男命……其大宜津比賣神を殺しき。故、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二の目に稲種生り、二の耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。04708=B96
- (27) ……其蛇を切散りたまひしかば、肥河血に變りて流れき。故、其中の尾を切りたまひし時に、御刀の刃毀けき。04908=B97
- (28) ……共に飲む時に、面を隠す大鉢に其進む酒を盛りき。於是、王子先づ飲みたまひて隼人後に飲みき。故、其隼人飲む時に、大鉢面を覆ひき。08103=B98

②「尔」の例

- (29) /故於是、天照大御神見畏み、天石屋戸を開きて刺しコモリ坐しき。尔、高天原皆暗く葦原中國悉闇し。因此而、常夜往きき。於是、万の神の聲は狹蠅ナス満ち万の妖ひ悉發りき。04501
- (30) 各も遣はさえし國の政を和平して覆奏しき。尔、天下太く平ぎ人民富榮えき。於是、初めて男の弓端の調・女の手末の調を貢らしめたまひき。11412=A44
- (31) 故、備に教覺したまひし如くして軍を整へ船を雙めて度幸しし時に、海原の魚大小を問はず悉御船を負ひて渡りき。尔、順風大く起こり、御船浪に従ひき。14309
- (32) 於是、穴穗御子軍を興して大前小前宿祢が家を圍みたまひき。尔、其門に到りましし時に、大氷雨零りき。18502
- (33) ……天皇御具床に坐しき。尔、蛭御腕を咋ふ即ち蜻蛉来て其蛭を咋ひて飛びき。19803=A45
- (34) ……伊勢國の三重嫁大御盞を指擧げて獻りき。尔、其百枝槻の葉、落ちて大御盞に浮きき。20013

③「於是」の例

- (35) (29のつづき) /故於是、天照大御神見畏み、天石屋戸を開きて、刺しコモリ坐しき。尔、高天原皆暗く、葦原中國悉闇し。因此而、常夜往きき。於是、万の神の聲は狹蠅ナス満ち万の妖ひ悉發りき。是以、八百万神、天の安の河原に神集々ひて…… 04501
- (36) 御頸の瑛を解きて口に含みて其玉器に唾入れたまひき。於是、其瑛器に著きて婢瑛を得離たず。故、着けるまにまに豊玉毘賣命に進りき。08111
- (37) 弟橘比賣命……波上に敷きて其上に下り坐しき。於是、其暴浪自ら伏ぎて、御船得進みき。13213
- (38) 此沼の邊にある賤しき女晝寝してあり。於是、日の耀き虹の如く其陰上を指しき。

15813=B100

④その他

- (39) 速須佐之男命……啼きイサチキ。……河海は悉泣き乾しき。是以、悪しき神の首、狹
蠅なす満ち、萬物の妖ひ悉發りき。 04005
- (40) (=35) 因此而、常夜性きき。 04501
- (41) ……河瀬神に悉、遺忘ること無く幣帛を奉りたまひき。因此而、役の氣悉息みて、
國家安平ぎき。 11108
- (42) ……國中を見たまへば國に烟満てり。故、人民富めりとして今はと課役科せたまひき。
是以、百姓榮えて役使に苦しびずき。 16613
- (43) (輕太子が姦通をした) / 是以、百官、及、天下人等、輕太子を背きて穴穗御子に歸
りぬ。 18411=B99

「現象」と言ってもいろいろあるが、要は、人間の意志とは無関係にそうなる、ということである。人間の意志と無関係であれば、予測不可能である可能性が高い。よって「故」はあまり使われない。

無論例外もある。(26) (27) (28)がそうであるが、これらには「故」が使用されるだけの理由がまた別にあるのである。その理由については前稿Bで説明したので、ここでは繰り返さない。

「是以」「因此而」など(=(39)~(43))は、用例数が少ないので、統計的な分析には向かない。前稿と同様、これらはデータに含めないことにする。すると「i2現象」に関しては、

- (44) 故=3例(23%)、尔=6例(46%)、於是=4例(31%) 計13例

ということになる。これも前項と同様にカイ=乗値を出してみると、3.46となった。これでは、5%水準でも有意ではない。期待に反して(44)は、偏りがあると見なすのには危険がある。「於是」が有意に多いとは言えない。

考えてみると、「現象」は、物語の冒頭である、と考える必要はなかった。ある出来事があり、それに引き続いてある「現象」が起こる、という事態は普通に考えられるからである。よって「現象」類の「於是」使用率があまり高くなくても、当然のことであった。本稿は「於是」の使用率の高いものを扱うが、この「i2現象」だけは少し性質が異なり、「於是」の使用率もそれほど高くないのであった。

事実、上の「於是」の用例を見ても、冒頭と見なされる例はない。(35)と(37)は、むしろ逆に「結果・結末」(前稿B)の「於是」と考えたほうが良い。(35)で説明すれば、「天照大御神が籠もってしまった。すると高天原等が暗くなった。このため常夜が続いた。ついには(=結末)悪神がはびこり多くの災いが発生した。」というように、「於是」が最後にくる文脈と考えるのである。するとこの直後で改行すべきだが、テキストは「……万の妖ひ悉發りき。」の直後で改行していない。しかし同じ西宮氏が、西宮1979(p.50)では、ここで改行している(べつに、このような些細なことを批判するつもりはないが)。

「尔」の用例と「於是」の用例とを比較してみると、「於是」のほうが不思議な、神秘的な事柄のようである。玉が離れなくなったり、荒波が急に起こったり、日の光が陰部を射したりする。(35)も、得体の知れぬ邪神がうごめくのであるから、ある意味で神秘的である。それに対し「尔」のほうは、虻に刺されたとか、葉が落ちたとかは、それほど不思議な出来事ではない。結局、「於是」は前述のように重大な、大げさな感じを出すことができるので、不思議な、神秘的な現象の描写にも使えるのであろう。

もっとも(29)と(30)は、「尔」はふさわしくない、重大な現象である。この2例は、文脈構

成上の都合上、すなわち後に「於是」が出るのでそれと重複しないようにするため、「尔」にされたのだと考える。2例とも後の「於是」の後件のほうが（つまり、それぞれ、「……妖ひ悉發りき」と「初めて……調を貢らしめたまひき」）、より重大な事柄であるように思われる。

(31) (32)も重大な現象である（ともに「大」字があることに注意）。こちらは「すると強い風が起こった／大雨が降ってきた」のように、継起的な叙述をしているのであろう。あるいは、「尔」は切れ目を置かないので（前稿Aほか）、「さっと起こった／降ってきた」意を表現しているのかもしれない。

13「戦闘・攻撃」戦闘する。戦闘開始時に矢を放つ／放とうとする。相手や、相手の住居を攻撃する。

①「故」の例

なし

②「尔」の例

- (45) 日子國夫致命乞ひて云ひしく「其廂の人、先づ忌矢弾つべし」。尔、其建波尔安王射つれども、得中てずき。11402
- (46) 其神を看行はしに其野に入坐しき。尔、其國造火を其野に著けき。13204=A47
- (47) 其弟忍熊王……喪船に赴きて空船を攻めむとしき。尔、其喪船より軍を下して相戦ひき。14507=A46
- (48) ……大御酒にウラゲて大御寝ましき。尔、其弟墨江中王、天皇を取らむと欲ひて、火を大殿に著けき。17806
- (49) (大長谷王子は)亦、軍を興して都夫良意美が家を圍みたまひき。尔、軍を興して待ち戦ひて、射出づる矢葦の如く来散りき。19012
- (50) (56のつづき)於是、天皇大く忿りて矢刺したまひ、百官人等悉矢刺しき。尔、其人等も皆矢刺しき。19910

③「於是」の例

- (51) 先づ八咫鳥を遣はして二人を問はしめて「……。汝等仕奉らむや」と曰ひき。於是、兄宇迦斯鳴籥を以て其使を待射返しき。09308
- (52) 大毘古命……丸途坂に忌翁を居ゑて罷往きき。於是、山代の和訶羅河に到りし時に、其建波途安王、軍を興して待遮り、各も河を中に挟みて、對立ちて相挑みき。11311
- (53) (18のつづき)「是白き猪に化れるは其神の使者にあらむ。……還らむ時に殺さむ」とのらして騰り坐しき。於是、大氷雨を零らして倭建命を打ち或はしまつりき。13509
- (54) 天皇崩りましし後に大雀命は……天下を以て宇遲能和紀郎子に譲りたまひき。於是、大山守命は……猶天下を獲むと欲ひて、其弟皇子を殺さむの情ありて、兵を竊に設けて攻めむとしき。15513
- (55) 穴穗王子も兵器を作りたまひき。於是、穴穗御子、軍を興して大前小前宿祢が家を圍みたまひき。18501
- (56) 天皇望けまして問はしめて曰ししく「茲倭國に吾を除きて亦王は無きを誰が人ぞかくて行く」とのらししかば、答へ曰らせる状も天皇の命の如し。於是、天皇大く忿りて矢刺したまひ、百官人等悉矢刺しき。19909=B101

「攻撃」には「火をつける」「氷雨で打つ」なども含めた。

データは次のとおりである。

- (57) 故=0例(0%)、尔=6例(50%)、於是=6例(50%) 計12例

これも前項、前前項と同じくカイニ乗値を計算してみると、13.78となった。よって0.5%水準で有意である。偏りがあると言ってよい。「故」が少なく、「於是」が多いと言える。

戦闘は、いきなりその描写を始めるほうが効果的である。つまり、予測不可能であるような描き方がされることが考えられる。また、とくに物語の冒頭にもってきたほうが、より効果的である。すると、確かな気持ちの「故」はあまり使用されず、冒頭の「於是」が多く使用されるはずである。上のデータは、このように解釈できる。

もっとも、定義に「戦闘開始時に」とあるのだから「於是」の多いのは当然であると批判されるかもしれない。そういう面も確かにあるが、すべての用例が「戦闘開始時に」ではないので、そのような批判は決定的ではない。

具体的に用例を観察してみると、「於是」は、「鳴り鎗を射る」とか「両軍が対峙する」とか、まさにこれから戦闘が始まる緊張した場面に使われることが、やはり多い。(54)は、臨戦状態ではないが、いずれ戦闘が始まるのである。結局、いずれも冒頭の「於是」である。中で(53)だけが、冒頭とは言いにくく、異色である。これは「於是」によって重大な感じ(先述)を出しているのではないか。この氷雨による攻撃によって、倭建命は最終的に命を落としてしまうのであるから。あるいは「大氷雨」とあることから、大きな感じを出す「於是」と考えてよいかもしれない。あるいは単に、山に登ってから氷雨に打たれるまで、間があるのかもしれない。

他方「尔」はどうかと言えば、「Aが矢を放てと言った。そこでBが矢を放った」(=45)とか「Aが野に入った。するとBが火をつけた」(=46)など、いずれも単純な継起的な文脈である。さらに言えば、「尔」は切れ目を置かないのであるから、「すぐに」などの速い感じを出すのかもしれない(先の例文(31)(32)の解説を参照されたい)。(47)(49)(50)は「すぐに応戦し(ようと)した」というようにも理解できるし、(46)と(48)も、「すぐに火をつけた」と理解できる。このような理解の可能性もある。いずれにせよ、「於是」のような重々しさはない。

ちなみに、(56)と(50)を同時に見ると、「尔」と「於是」の絡み合いが理解でき、興味深い。雄略天皇が一言主大神と一戦を交えそうになる場面であるが、まず「於是」によって緊張が高まる(と同時に、ひどく怒った感じも出る)。そして「尔」によって、雄略方に即応して一言主方が反応した様子が描かれるわけである。「於是」と「尔」を入れ替えると、ニュアンスが変わってくる。すなわち「……答へのらせる状も天皇の命の如し。尔、天皇大く忿りて矢刺したまひ、百官人等悉矢刺しき。於是、其人等も皆矢刺しき。」とすると、段々緊張感が高まり、一番最後の「其人等も皆矢刺しき」で最高になるような印象を受ける。修辞学で言う“漸層法”のように。

以上、「出来事」類に関しては、「i2現象」類を除いて、統計学的には「於是」の割合が高いと言えることを見た。そしてそれらのデータは、だいたい理論的に理解できた。

なお、i類全体で見るとどうなるかと言えば、やはり「於是」の使用率が高い。すなわち、データは次のようである。

(58) 故=8 (15.7%)、尔=22 (43.1%)、於是=21 (41.2%)、計=51

(24)などの場合と同じようにして、カイニ乗値を計算すると、28.38となり、危険率0.5%で有意となる(自由度=2)。よってデータに偏りがあると言え、「於是」は多いと言える。

III 「紹介・登場」類

これは、登場人物を紹介したり、人物などを物語に登場させる場合である。ともに、物語の最初にほうに存在するはずのものである。すると「於是」の使用率が高いはずである。

そして、「紹介」とは、既出／未出の人物について、その属性やその時点での状態を記述するものであり、「登場」とは、新出の人物などを物語に登場させるものである。前者の場合、紹介内容は読者にとって当然未知のものであるから、確かな気持ちの「故」は使いにくい。後者の場合も、人物などが登場することは通常予測不可能であるから、先の「出現」類と同じく、「故」は使いにくいことが予想される。

この類には細分類を設けなかった。用例を掲げよう。

①「故」の例

なし

②「尔」の例

(59) (63のつづき) 於是、七の媛女高佐士野に遊行べるに伊須氣余理比賣其中に在り。尔、大久米命、其伊須氣余理比賣を見て、歌を以て天皇に白して曰ししく……。／尔、伊須氣余理比賣は其媛女等の前に立てり。乃ち天皇、其媛女等を見たまひて、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てるを知らして、歌を以て答曰ししく…… 09809 [紹]

(60) 口子臣此御歌を白す時に大く雨ふりき。尔、其雨を避らず……。尔、匍匐進み赴きて庭中に跪きし時に、水潦腰に至りき。……。尔、口子臣が妹、口比賣、大后に仕奉れり。故、是口比賣が歌曰ひしく…… 17112=A49、E3 [紹・登]

(61) 此時に、新良の国主御調八十一の艘を貢進りき。尔、御調の大使、名は金波鎮漢紀武と云ふ、此人深く薬の方を知れり。故、帝皇の御病を治め差しまつりき。18305 [紹・登]

(62) ……目弱王……其天皇の頸を打斬りて都夫良意富美が家に逃入りき。……。／尔、大長谷王子當時童男にありき。即ち此事を聞きたまひて慷慨り忿怒りて…… 19003=B103 [紹]

③「於是」の例

(63) 大后とせむ美人を求めたまひし時に、大久米命が白ししく「此間に媛女有り。是、神の御子と謂ふ。……。……亦名は比賣多多良伊須氣余理比賣と謂ふ。……」。／於是、七の媛女高佐士野に遊行べるに伊須氣余理比賣其中に在り。09804 [登]

(64) 其嬢子「仕奉らむ」と白しき。於是、其伊須氣余理比賣命の家、狭井河の上に在り。天皇……幸行して一宿御寝坐しき。09905 [登]

(65) ……活玉依昆賣、其容姿端正しくありき。於是、壮夫有り。其形姿威儀、時に比無し。11110 [紹・登]

(66) 八十神、是伊豆志袁登賣を得むとすれども、皆得婚はず。於是、二の神有り。兄は秋山の下米壯夫と号ひ、弟は春山の霞壯夫と名ふ。16101 [紹・登]

(67) 天皇、其弟速総別王を以て媒として、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。……速総別王復奏さずき。尔、天皇、女鳥王の坐す所に直に幸して、其殿戸の闕の上に坐しき。於是、女鳥王機に坐して、服織らしき。尔、天皇の歌曰ひたまひしく…… 17402 [紹]

(68) 天皇神牀に坐して晝寝したまひき。……。於是、其大后の先の子、目弱王、是、年七歳にありき。是王、其時に當りて其殿の下に遊べり。18907=A48 [紹・登]

(69) 天皇崩りましし後に天下を治めたまふべき王無し。／於是、日継知らす王を問ふに、

市邊忍齒別王の妹、忍海郎女、亦名は飯豊王、葛城忍海の高木角刺宮に坐しき。20403

〔紹・登〕

④その他

(70) 其地より踏穿ち越えて宇陀に幸しき。……／故尔、宇陀に兄宇迦斯・弟宇迦斯の二人有り。09306=B102、E5〔登〕

参考のため、「紹介」には〔紹〕、「登場」には〔登〕という略号を各用例の末尾につけた。両方の性質を持つものもある。例えば(60)は、口比売を「登場」させると同時に(口比売は初出)、口比売がどういう人物であるか「紹介」もしている。

「登場」というのは、先の「i1類 出現・発見」に近い面もあるが、「出現」はあくまで出来事の描写であって、動的である。「登場」は、人物などが最初に出る時の説明であって、静的である。例えば(65)(66)と、先の「出現・発見」類の(4)とを比較されたい。(4)は「上は高天原を光らし下は葦原中國を光らす」とあり、描写的である。(65)(66)は、具体的な描写ではなく、「(あるところに)一人の男がいた」などという、説明的表現である。また、こちらの(60)と、先の(22)とを比較されたい。(22)は「先導した」という動作に重きがあるのに対し、(60)は、動作ではなく、「後に仕えている」という、広い意味での属性の記述である。

(67)が「紹介」と言うのは少し変かもしれない。女鳥王は既出であるので、「出現・発見」ではありえない。女鳥王のそのときの状態を述べている「紹介」であると考えた。

さて、データは次のようになる(既述のように「故尔」は別々に数える)。

(71) 故=1例(8%)、尔=5例(39%)、於是=7例(54%) 計13例

これもカイ二乗値を計算してみると、28.05となり、0.5%水準で有意である。偏りがあると言える。「於是」が多いのは明らかである。

用例を一つ一つ観察してみると、「於是」が使用される例は、やはり、人物など(例64だけ人物でなく「家」である)が新たに登場し、物語が新曲面に入るものばかりである。しかし(67)は、別の説明も可能である。結論から言えば、これは視点の転換を表すのではないか。「……天皇は敷居の所に居られた。さて女鳥王はと言え、機に座って服を織っていた」というように。「於是」は切れ目を表すのであるから、このような用法も可能のはずである。

考えてみれば、紹介というのは、べつに物語の最初に行わなければいけないものではなかった。物語の途中で随時紹介してもかまわないはずである。ここに「尔」を使う可能性が出てくる。しかも「尔」は、重々しい「於是」よりは軽い。「於是」では大げさになってしまうようなとき、「尔」を使って「軽い紹介」(前稿B)をすることが考えられる。このように考えて上の例を見ると、「尔」の4例は、いずれもこの「軽い紹介」である。例えば(59)は、既出の伊須気余理比売について、その姫は今どうしているか、述べるわけであるが、「於是」を使うと、また新たに姫を登場させることになり、大げさになってしまう。次に(60)と(61)は新出の人物であるから、「登場」である。と同時に、「大后に仕えている」とか「薬のことをよく知っている」とか、その人物の属性も述べている、つまり「紹介」でもある。これらも、「於是」では大げさになりすぎるので、「尔」を使って「軽く」紹介しているのだと考える。つまり口比売などはそれほど重要な人物ではないのである。(62)については前稿Bを参照されたい。

最後の(70)は「故尔」である。この例については前稿Bで説明したが、少し補足説明をしながら、もう一度述べる。宇迦斯兄弟は初出だから「故」でなくてよいのだから、なぜ「於是」でなく「尔」なのか。答えは、逆賊だから低く扱われる、よって「軽い紹介」(と言うより「軽い登場」)の「尔」が使われるのである。そして、後に天皇方の敵となる兄弟について、「確かにこういう兄弟がいた」というように、前もって確認・強調しておくために「故」を付加し

たのである。つまり「先触れ」の用法（前稿Bなど）である。

以上、「紹介・登場」類について、「於是」の使用率が高いこと、その理由、「尔」が使われている例について、などを述べた。

IV まとめと補足

「出来事」類と「紹介・登場」類の全用例を掲げ、「於是」の使用率が高いことなどを見てきた。それらの事実は、多くは理論的に理解できることも見た。そしてまた、それぞれの接続詞がどのような役割を担っているのか、具体的に考えた。中には考えすぎもあるかもしれないが、『古事記』は、接続詞を十分吟味して読む必要があると信ずる。

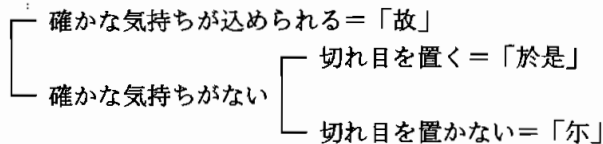
もっとも、「於是」の使用率が高いと言っても、それは統計学的に見て偏りがあるというだけのことであって、感覚的にはそれほど「於是」が多いとは感じられないかもしれない。この点が「故」の場合と比較して、不満が残るところである（前稿A、B、C、Fなどで述べたように「故」については、使用率が100%の後件などもあるのである）。

さて、本稿で述べたような分類が妥当なものであるか、読者諸賢のご批判をお願いしたい。もっとも、分類の枠組自体は、他の分類（a類b類など）との関係において妥当性が判断されるべきであるから、本稿のみで判断することはできない。前稿Aなども併せてご覧いただきたい。また、分類の枠組は良くても、その分類に入れられている用例がおかしい、という批判も考えられる。この場合、そのような用例が一つ二つであればそれほど問題ではないが、多数になると、その分類の存在理由に関わる大問題となる。

言うまでもないが、もし、本稿の分類の枠組や用例の所属が恣意的にすぎ、妥当ではないと認められるならば、先に示したデータも、無意味なものになってしまうのである。

また、用例が少なすぎるという批判も考えられる（i1類を除いて）。この批判は、甘んじて受けるしかない。

ここで、『古事記』の接続詞の体系について、もう一度考えてみたい。前稿Aその他では、次のような体系を仮定した（これは藤原1960の考えと大差ない）。



本稿の論述の範囲から判断すれば、この仮説は妥当である。つまり、例えば、「於是」を「確かな気持ちがない」「切れ目を置く」ものであると考えれば、データや用例をよく説明できた。

もっとも、例えば、「於是」は切れ目を置く→調子を変えることができる→緊張感などを出せる、などという説明は、連想が過ぎるかもしれない。しかし、このように考えることも可能ではある。

最後に三点、補足しておく。まず、本稿においては「故」を「接続詞」と称してきたが、「確かにこうこうだ」という意味の場合は、接続詞ではなく、評価の“副詞”である。しかし、便宜的に、前稿A～Fと同様、すべて「接続詞」と称した。

次に、接続詞の係り先の問題がある。例えば、(69)で言えば、「於是」は「……飯豊王、葛城忍海の高木角刺官に坐しき」に係るのではなく、「日継知らず王を問ふに」に係るのかも

れない。これを完全に客観的に決めるのは不可能である。本稿では当然すべて私意によったが、それほど大きな間違いはないはずである。と言うのは、私はこれまで5回以上後件の分類作業をしている。その中には、接続詞の係り先が不明確な場合、事柄を機械的に3個まで後件と見なす、というやり方のときもあった。その時のデータと、今回のデータとでは、傾向に大きな違いはない。よって、私意によったとは言っても、それほど大きな間違いはないと考える（このことは前稿Aの注7で述べた）。

とくに、今回取上げた「於是」の場合、後件は一つの事柄と言うよりも、一連の事柄、つまり複数の事柄の連なりと考えた方がよい場合が多い。しかし処理の都合上、一つの接続詞には一つの後件を考えることにした。

最後に、接続詞の訓読の問題がある。西宮氏は、「故」をカレ、「尔」をシカシテ、「於是」をココニと訓んでおられる。しかし、とくに「尔」については異説も多い。この問題について議論できる能力は私にはないので、本稿でも前稿でも、あえてこの問題は取り上げなかった。ただ、一つだけ言いたいことは、「尔」と「於是」は機能もニュアンスも違うのであるから別訓にすべきである、ということである。別訓にしなくては、『古事記』の文脈を味わうことはできないと思う。

私は一介の文法屋にすぎない。『古事記』の専門家から見れば、私の研究にはいろいろと問題点もあろう。ご批判をお願いする次第である。

注

- 1) この数字は、例えば「故尔」は、「故」と「尔」を別々に数えたので、前稿Aの表1の数字とは異なっている。
- 2) 「於是」が物語の冒頭に多いというのは小野田(1955)が言われているが、冒頭でなく末尾にくる「於是」もあるものであり、私見のように言うのが良いと考える。なお、「於是」が切れ目を表すというのは、すでに藤原(1960)が述べている。

引用文献 (A~Fは拙稿の略号)

- 伊土耕平(1995 a=A, b=B) 「『古事記』の接続詞について(上)(下)」『国語国文』64の2、3
 — (1995 c=C) 「『生む』と『成る』—『古事記』の接続詞の使い分けについて—」『解釈』41の2
 — (1995 d=D) 「『古事記』の中の長距離移動表現と接続詞」『解釈』41の11
 — (1996=E) 「『古事記』の「故尔」について」『国語国文』65の1
 — (1997=F) 「『古事記』の接続詞の後件—「神や人や家の歴史に関するもの」と「皇室による統治に関するもの」—」『奈良大学紀要』25
- 小野田光雄(1955) 「古事記の助字『尔』について」『古事記年報』2
- 西宮一民(1979) 『新潮日本古典集成 古事記』新潮社
- 藤原照等(1960) 「古事記の文接続について」『国文学攷』23

Summary:

In KOJIKI, particular sentences often require a particular conjunction. In this paper, I will take up the conjunction "KOKONI" and its following sentences. The sentences are divided into two types. They are briefly named "happenings" and "introduction or entrance".